



アジアの空軍軍拡競争を誘発する中国

「機は熟す」か（第2回）

- 主任研究官 東 義孝

第17号 2011年1月26日

NIDSコメンタリー

東アジアの空軍軍事バランス

図2のとおり、極東ソ連軍は、1990年まで最も優勢であったが、旧ソ連の崩壊を境に極東ロシア軍の戦闘機数が激減し、2010年の空軍力は、1990年比で半分以下である。今後についても、40年も前に製造されたMIG-25を現役に復帰させ2010年時点でも使用しているという苦しい財政事情から、基本的に横ばいである可能性が高いが、仮に、全てのSu-27SがSu-27SMへ近代化改修された場合でも図のように微増に止まると考えられる。

中国は、2005年に早期警戒管制機(AWACS)を導入したのをきっかけとして、東アジアの空軍軍事バランスにおける中国の優勢を確保し、その差が年々開きつつある。このような中国の急速な空軍力の増強は、経済成長の結果である可能性もあり、現に経済成長率の低下した2010年には、中国政府発表の国防費の伸びは1桁台まで低下した。とはいえ、このままの伸び率で推移しても、2020年には2倍以上になるペースである。いずれにせよ、中国の空軍力の増強ペースはアジア諸国の中で突出している。2015年には、低位シナリオ及び高位シナリオともに、自衛隊と在日在韓米軍を加えた空軍力を上回り、冷戦時代の旧ソ連に対する軍事バランスより日本の中国に対する軍事バランスが悪化する可能性が高い。

図からは、その中国に遅れる形で韓国が空軍力を急速に増強していることがわかる。韓国は、主敵としていた北朝鮮の空軍力が基本的に横ばいであるのに対し、韓国では、2002年頃から北朝鮮以外の「不特定脅威」への対処が強調されているとされる。(武貞秀士「韓国の脅威認識の変化と軍近代化の方向」『防衛研究所紀要6巻第1号』2003年9月、P43)その不特定脅威の対象には、北朝鮮以外の周辺国であるロシア、中国などが含まれていると推測される。韓国は、2011年にAWACSの導入を予定しており、かつ、F-15K戦闘

機を21機追加発注した効果により、2015年に空軍力で日本とほぼ同等となり、韓国と北朝鮮との差は約5.6倍に開くものと予想される。

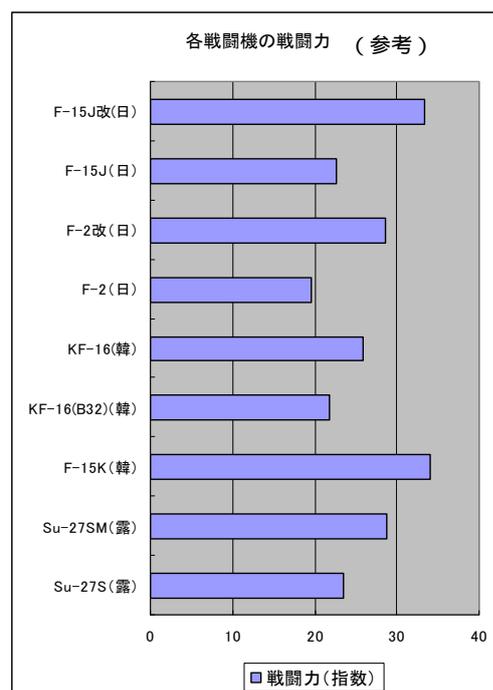
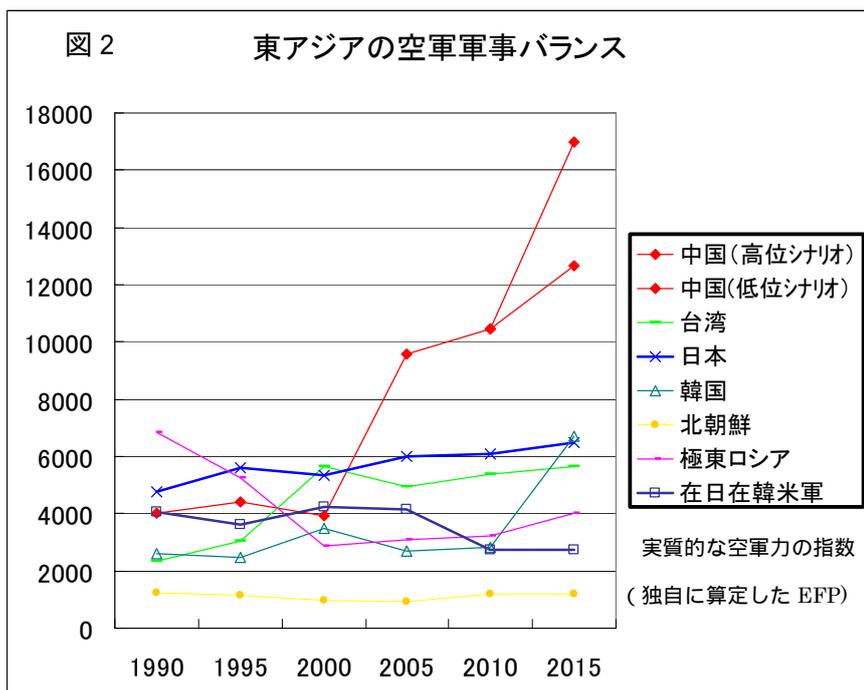
このような空軍力の急激な増強の原因を韓国の脅威認識の変化とあわせて考えれば、中国の空軍力の増強に対応したものと解釈することも可能である。これを含め、中国の空軍力の増強の影響は、南アジア及び東アジアに波及し空軍の軍拡競争を誘発しているかに見える。それに対して在日在韓米軍(在日米軍海兵隊及び海軍の1個空母打撃群(CSG)の所属機を含む。)は、F-35の配備遅延などにより今後横ばいで推移するであろうし、我が国は、中期防衛力整備計画上のF-15及びF-2の改修及び予想されるF-4の減少の効果のみ考慮し、2015年までに部隊編成が間に合わない次期主力戦闘機(FX)を考慮に入れないと戦闘機の近代化改修による微増で推移するであろう。

おわりに — 「機を熟させない」ために

我が国と韓国は、同じような経済構造、社会体制等を持ち、歴史認識の面はともかく、国益の面で一致する点が多い。また、日米同盟と同じく、韓国も米国と同盟しており、同盟関係による利害の対立の可能性も小さい。したがって、東アジア地域の空軍軍事バランスの観点からは、日韓の防衛協力の深化が「機が熟す」のを防ぐ有力な方策であると考えられる。

一方、米軍は、東アジアでこそ停滞しつつあるものの、米空軍全体で見れば2015年時点でさえ中国空軍の高位シナリオの3倍以上の空軍力を持つ。その後、導入されるF-35の性能と部隊配備のスケジュールが報道等のとおりであるとすれば、少なくとも2020年ごろまで米空軍は、中国空軍に対しその差を維持し続けると予想される。したがって、米軍がアジアの安定に興味を失わないよう同盟関係をより一層深化させることが、「機が熟す」のを避ける最も有効な手段で

あると言えよう。



プロフィール

profile

主任研究官

東 義孝

専門分野：

米国の防衛力整備及び調達制度

軍事 OR

本欄における見解は防衛研究所を代表するものではありません。

NIDS コメンタリーに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。

ただし記事の無断引用はお断りします。

防衛研究所企画室

直 通：03-3713-5912

代 表：03-5721-7005 (内線 6584, 6258)

FAX：03-3713-6149

防衛研究所ウェブサイト：<http://www.nids.go.jp>